

以上のように75戸以上の民家・公共建物・社寺が判明した。この家並みの配置は、Fig. 1のとおりであるが、このうち、この大火の火元となった清水金次郎については、前述したように不明な点が多い。北海道未開地処分法制定前後に、自然集落として成立した旧生剛市街地と異なって、浦幌市街地は、浦幌駅開業に伴う、いわば人工的な集落である。駅前を中心とした市街地がT字状に形成され、さらにその周囲が市街化して膨張していくパターンを示している。こうした時期の集落の人口は自然増以上に社会増が優先し、寄留者も増加する。1916年前後の出入寄留者の数は不明であるが『浦幌村五十年沿革史』(間宮、1949)によれば、1906~1909年の出入数はTable 1のとおりである。また、同時期の戸数及び人口はTable 2のとおりである。この2表を見てみると1906年で本籍のある人口のほかに、差引き 594人が寄留者として入村している。これらを各年ごとに集計してみると、

1906年	594人	22.06%
1907年	753人	27.14%

#### 〈座談会〉

## 住吉神社と加賀団体

1908年	1,034人	36.00%
1909年	1,541人	49.89%

となる。また、本籍のある人口に対する寄留人の割合いも前記のとおりとなり、本籍のある人口のほかに1909年では5割増近くの実人口があったことになる。清水金次郎もこうした寄留人のひとりであった可能性があり、実体がなかなか把えられない理由のひとつとなっている可能性がある。

(浦幌町郷土史研究会員)

#### 引用文献

- 安藤龍逸・後藤秀彦(1978)「生剛村旧市街の街並み形成について」『浦幌町郷土博物館報告』12 浦幌  
 酒井章太郎(1907)『十勝史』 帯広  
 鈴木智子・後藤秀彦(1981)「1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成」『浦幌町郷土博物館報告』17 浦幌  
 間宮不二雄(1949)『浦幌村五十年沿革史』 浦幌

この記録は、浦幌町字稻穂に所在した住吉神社が八幡神社と合祀される際に、地元加賀団体の末孫の方々の要望により聞き書きしたものである。収録後、11年を経ているが加賀団体の来歴・稻穂開拓・稻穂の獅子舞など貴重な内容が含まれているのでここに公表するものである。

収録日：1973年3月28日

聞き手：後藤秀彦・佐藤芳雄

出席者：竹田才一・舟田善幸・鉢木明男・大谷道男・大谷郁・中井祥憲

会場：浦幌町字稻穂 旧住吉神社々殿

問 本日はお招きをいただき誠にありがとうございます。住吉神社が八幡神社と合祀して、新たに稻穂神社として創建されると聞き、この機会に稻穂地区、特に加賀団体の開拓時代の様子などをお尋ねしたいと思います。私、後藤と申します。又、同行した者は佐藤芳雄と申します。どうぞ、よろしくお願ひ申し上げます。さて、この加賀団体は名前からして石川県出身者であるということ

は明白ですが、当時こちらへ来られた方は長男の方が多いのですか。

答 先々代のこととなるとよくわからない。長男の方も来られたと思います。昼にうちの婆さんから聞いたのですが、昔の内地のことばで愛称の「ギャンサ」「クザエモン」ということばがあります。またクニの訛りで「アジキ」ということばもあります。アジキはここでは舟田善幸さんを意味

することばです。

問 舟田善幸さんをアジキというのですか。

答 舟田さんを兄貴だからそう言うのか、本家だからアジキというのかわからない。ここに中井祥憲さんもおられるので聞いてみたいと思っている。

中井 アジキということばは今のことばで言えば本家ということだ。越前のことばとよく似ている。

問 越前というと京都地方のことばが入ってきていますね。

答 そうなんです。とても優しい感じのことばです。

問 アジキというのは。

答 アジキということばで判るのは舟田さんのところということだけだ。

問 「アジキ」＝「兄貴」ですか。それは稲穂では舟田さんということになりますか。

答 イヤ、本家・分家の称号だと思う。舟田さんと塩村さんがアジキでいる。

問 塩村さんはどちらの出身の方ですか。

答 石川県津幡町出身です。

問 塩村さんと竹田さんとは内地で何か関係があ

るのですか。

答 塩村さんから竹田へ養子に入った。先々代のことになる。うちのお袋が内地から来たのが6歳のときだ。

問 舟田さんも津幡出身ですが。

舟田 津幡です。津幡の駅前です。

問 むこうでも農家だったのですか。

舟田 そうです。

問 明治42年に来たんですね。『浦幌村五十年沿革史』によりますと伏木港から9月7日に出発して9月12日に函館に着いた。その後、道庁へ行って「十勝へ行けば未だ土地がある」ということを聞いて、木越与作さんを頼って浦幌へ来た。そこで稲穂の一部を見せてもらって川畠米次郎氏宅に相談をして土田農場の君貞次に面会して、さらに現地を見てもらって、同氏の意見でここに決めたということになっている。このへんのいきさつについて疑問はないですか。

答 伏木港出発ではなく、汽車に乗って来たと聞いている。

問 函館からですね。



PL. I 座談会に出席してくれた人々

答 鉄道がついてから数年経っている。

問 明治42年3月29日に東京を介して青森へ来た。本隊は汽車で來た。したがって、東京→青森→小樽ということになる。

答 小樽へ上っているんですか。初めて聞いた。

問 函館から小樽までの汽車賃は半額です。ただし、旭川へ抜けると汽車賃がタダなんです。

答 旭川まわりということは聞いている。

問 「加賀団体」という名称は、来たときに使ったのですか。今でも地名として残っていますか。

答 地名は残っていませんが、「お前、どこにいるんだ」と聞かれたら「俺はもとの加賀団体にいるんだ」と言えば想像はつく。

問 「加賀団体」という地名は「稲穂」と同じ意味ですか。

答 早く言えばそういう事にもなる。と、いうことは「加賀団体」がこちらの沢のグループで「団体沢」。向こうが「大沢」。今でもそういうことが抜けない。

問 団体沢は「加賀団体」の人たちの入ったところ。「大沢」はどこかの団体が入ったわけですか。

答 いえ、バラバラに入って來た。「加賀団体」から分家するのに土地を求めて入った人もいる。向こうの方が広いから「大沢」という。大沢には昔は阿波の人が多かった。

問 四国の阿波は當時、「藍」という染料用の植物をたくさん作っていた。輸入かなんかで藍の価格が暴落して、農家がやっていけなくなってしまった北海道へ來た人が多い。それから「稲穂」という地名は稲作を連想させられますが、『浦幌村五十年沿革史』を見ると米川富士松さんらが水田を造ろうとした経過が書いてありますが、ここでは以前水田を造っていたのですか。

中井 稲穂の水田の初めはうちの親父(中井与作)と越坂善松さんだ。何かの拍子に家の前が湿ってくるのでモミを蒔いたら、うまくとれたんだそうです。それが始まりです。

問 けっきょく、稲作は津幡でやっていたわけですから慣れたものだったんですね。その後稲作はどうなったんですか。

答 いろいろな起伏があったでしょうが、野沢文治村長のときには最高にとれた。その前の高橋熊太郎が「稲穂」の名を付けたと聞いている。

問 そうすると、そのころが最も盛んにやってい

たころですね。

答 手が廻らなくなつて、秋になって大きな草刈鎌で刈り取って収穫していた人もいた。

問 それがどうして、今全くやらないのですか。

答 最盛期には稲穂地区で100~300町歩作っていた。鉢木さんでは6町歩くらい作っていた。毎年取れていれば続けていたが、いい作が5年に1~2回くらい。そのうちに山が削られて土砂が流れ出した。また、洪水が起るということで良い条件の所しか作らなくなつた。

問 今は全くないですか。

答 今は私のところと田中さんくらいです。

問 どのくらい作っていますか。

答 私のところで休ませたところも含めて6反です。

問 自分のところで食べるくらいは十分ですか。

答 去年のような年であれば十分です。昭和25~6年ごろから水田から酪農に徐々に切りかわってきたと思う。その当時、この土地を改善するために正規に土地区画をすると1区画5町歩。畑なら1町5~6反ということだった。それで畑の区画割を行い河川改修をした。その結果、水田が一概になくなつた。

問 今のお話はいつごろのことですか。

答 昭和25~6年ごろからそういう話がおこり、水田から酪農に切りかわっていった。当時はよく水がついたもんだ。

問 国道38号線の沿線のような状態だったんでしょね。

答 そうです。稲穂小学校付近もそういう状態だった。

問 大水は何年か1度に大きなものがありますがそういう気憶はありますか。

答 あります。大水の後に稲穂小学校のグラウンドで鮭の頭を叩いて歩いたもんだ。

問 フルマントンベツ川は下頃辺川の支流になるのですね。

答 そうです。

問 チャシコトンベツ川はこちらですね。このチャシコトンベツ川はアイヌ語のチャシの向こうの沼にある川の意味だと思います。

答 水利権の切りかえどきというのは、ちょうど20数年前、私共と舟田さんなんかが図面書きなどをしたのですが、用途が水田から畑作に切りかわ

っていったものですから、そこで立ち消えになっています。竹田さんのところに控があるはずだ。昭和30年まではあった。

問 もうなくても実際は困らないわけですね。

答 そうです。ただ、公害問題が起これば問題となると思う。

問 次に神社の話をうかがいたいと思いますが、現在稲穂には神社が二つあるわけですね。それを一つにしようとしているわけですね。

答 もうしてしまったんです。

問 じゃあ、この建物は正式には神社ではないわけですね。

答 御神体が二つあったのを一つにした。もう一つの八幡さんの社殿を修理して間もない時期でもあったし、又移動させるにも困難ではない時期であったので八幡さんの社殿に移した。そうして稻穂神社の社殿とした。

問 八幡さんは稻穂小学校の裏ですね。

答 そうです。

問 そうすると八幡神社と住吉神社の二つが稻穂にあったんですね。住吉神社を造ったのは加賀団体の人たちですか。

答 そうです。

問 八幡神社を造ったのはどういう方たちですか。

答 八幡神社を造ったのは稻穂の草分けの人たちが祭ったものと思う。

問 住吉神社の方は石川県津幡ということで出身地がハッキリしていますね。大沢の方の八幡神社は色々なところの出身者の人たちが造った。そして、今度合祀したときは八幡さんになるのですか、住吉さんになるのですか。

答 名称は「稻穂神社」ということにしました。

問 それで、御神体は二つということですか。

答 そうです。

問 住吉神社の建物は創建当時のままですか。

答 入植当時は、場所は同じだがドスナラの空胴に御神体を入れていた。一種の祠です。そうして皆の力を合せて現在の建物をつくった。大正13年4月15日が建前だった。

問 材料は。

答 当時、木は豊富だったので適宜切って使用したものと思う。柱は木挽きしたものもあるだろうし、刃広で削ってカンナをかけたものもあると思う。

問 ここには木挽きを実際にできる人はいませんね。

答 今、70歳以上の人なら木挽きはできる。

問 木挽鋸は幅の広い背の円くなっているやつですね。

答 「胴割り木挽」というのがあって、鉄道の枕木2本とれるのがあった。

問 この辺は、たくさん木を切り出していたんですか。

答 かなりあったそうです。明治26年、福井県から開拓へ入ったときは大津へ蒸気船で上って帶広まで5日間くらいかかったということだ。途中は駅通所に宿泊した。

問 駅通所に泊った気憶はありますか。

答 昔の人は泊ったということだ。

問 浦幌～稻穂間の現在の町道は古いものですか。

答 もうかれこれ60数年経つと思う。浦幌駅ができるて浦幌へ行くことが多くなった。それ以前はもっぱら大津へ行った。したがって吉野へ抜ける道路の方が古い。下頃辺川づたいには行けなかつたので、山縁を歩いた。何年ごろかわからないが下の方にマッチ工場なんかもあったということだ。

問 どのあたりですか。

答 米川さんよりさらに下で、資材を道産馬に積んで運んでいた。

問 駄鞍を使った気憶はありますか。

答 使った気憶はない。馬の両脇と真上に三つ積んだ。一頭だけでは話にならないので何頭も連結して使用した。

問 当時は馬を使って農業をしたが、道産馬が多くたですか。

答 私らのころはもう大分改良されていた。木越喜一さんなんかは朝3時ごろ十勝太へ行って魚を仕入れ、農家を廻り道産馬の上から、降りないで「こんちわ」と言って魚を売る商売をしていた。当時、四季の魚を売るときは、物に入れるようなことはしないで馬の上から軒先へ投げていったという。

問 住吉神社の祭礼は春・秋の2回ですか。

答 そうです。

問 かなり賑やかにやっていたのですか。

答 そうですね、昔はかなり賑やかだったようです。9月15日16日が祭礼だった。

問 春と秋の祭礼の日を決めたいきさつはあります

すか。

答 あまりよくわからない。秋は豊年を祝って…

問 例えば石川県津幡と同じ日とか。

答 それはないと思う。4月15日というのは住吉神社の建前の日だ。9月15日はわからない。

問 9月の祭礼は取入れには少し早いですね。

答 その時分はもう今年は豊作か不作か判っている時期だ。

問 獅子舞の記憶はありますか。昭和7年ごろにはもう獅子舞をやっていないんですよね。

答 そうです。

問 そうすると獅子舞は大正時代ですね。

答 獅子舞をしたのは大正時代だ。だけども大正何年ごろのことかはわからない。見たことは全然ない。

問 そうすると獅子舞に関する資料は全くないことがありますね。

答 先代がまだ若いころだ。獅子舞の気憶のある人といえば古老では舟田実さんだが入院中だ。高松与次郎さんは判っていると思う。踊り方も全然わからない。とにかく太鼓が後棒になつたり先棒になつたりして踊ったものらしい。津幡の獅子舞だ。

問 津幡に現在でも獅子舞が残っていたらきっと同じ内容のものですね。

答 踊りの師匠格は越坂さんとか舟田権次郎さんだ。舟田実さんの父親だ。

問 津幡を調査すればわかるかもしれない。町内で現在残っているのは万年の「浦幌開拓獅子舞」だけだ。

問 稲穂小学校のことについて伺いますが、学校は以前から現在位置ですか。

答 初めは小沢文夫さん宅の近くにあった。

問 その当時は集落がそちらの方に片寄っていたのですか。

答 聞き伝えによると当時は幾千世もこの学校に通っていたということだ。

問 で、その後はどこの位置にかわるのですか。

答 そのあと聞くところによると熊谷さんという家の北に学校があったということです。現在の学校から1km半北へ行ったところです。

問 そこは何か学校の跡か何かありますか。

答 学校の跡らしい形のものは残っています。

問 最初のところはどうですか。

答 最初のところは全然わからないです。最初のところの学校といえば教授場とか言っていたと思う。校舎もあまり大きなものではなかつたし、学校林なんかもなかつたと思う。

問 『浦幌村五十年沿革史』を見ますと明治37年に開設されたとあり、教室は神社の社殿を利用したと書いてあります。

答 第1期生がクマガイカズヨさん、オザワヒロムさんたちだ。その人たちに聞けばわかるかもしれない。

問 中井さんのときはここの学校ですか。

答 2番目の所です。

問 そのころは先生の数は何人ですか。

答 1人です。

問 校舎の様子はどんなものでした。

答 木造の教室で、生徒が約70名ほどいました。

問 70名の子供を1人で教えるというのは大変ですね。

答 そうですね。同級生は13名で、現在稲穂に残っているのは2人です。

問 そうすると、子供の数は現在よりずっと多いですね。

答 ああ、ずっと多いです。昔の教室は20坪で教壇から窓まで1年生から6年生がびっしり並んでいた。現在ではとても考えられない。

問 竹田さんはどちらの学校ですか。

答 僕の場合は現在のところです。

問 今の校舎は建てかわっていますか。

答 十勝沖地震のときに校舎がつぶれて建てなされました。昭和27年のことです。あのとき児童の数が40人ほどいた。今であればOHPなどの教育機器がたくさん使われているが、当時の状況は今のこどもたちに口で言ってもわかつてはもらえないと思う。私たちの習ったころは1年と2年、3年と4年、5年と6年と3つに分けて教えられた。どうかすると1年生が3年生の勉強をしたり、翌年には2年の勉強に戻つたりした。

問 大谷さんはどちらですか。

大谷 私は芽室の学校なんです。

問 そうすると福島県から芽室に入植されたわけですか。

大谷 そうです。私は大正3年に入植した。

問 そうすると移住としてもかなり遅い方ですね。

大谷 そうですね。あの当時の者は喰われないも

のだから、船に乘ったり、朝鮮へ行ったり、色々なことをしていた。

**問** 幾千世にあった林田農場というのはご存事ですか。加賀団体の入いる前のことです。さらにこれより前に小沢農場というのが稲穂にあったんですね。この林田農場とか小沢農場とかいうのは、現在の稲穂のどのあたりに当たりますか。

**答** 小沢農場というのは最初の小学校を創った付近にあったんではないか。

**問** 加賀団体の入植したころには、もう小沢農場はなかったのですか。

**答** 加賀団体が入植したころには、競走馬などももっていてなかなか豪勢にやっていたようです。

**問** 林田農場はいかがですか。

**答** 林田農場はあったどころではない。平井さん・田村さん・広富さん・泉さん・西田さん・工藤さんなどは皆林田農場にいた人だ。工藤さんのところに農場事務所があった。

**問** 稲穂ですと「加賀団体」という形で入植して来て、最初から自作農としてやって来たわけですか。

**答** 大爺さんの話を思い出してみると、なぜ北海道へ渡ってきたかというと自分の土地が欲しいという一心で渡って来たということだ。その当時から小作というのは本当にみじめな想いをしてきた。それで自分でやるんだということで土地を求めたんだ。

**問** そうすると最初から自作農になったんですね。町内にも岐阜・土田・谷谷などの大農場がありましたね。そこへ入った方はほとんど小作として入ったわけですけど、そういうところから比べると恵まれていたわけですね。自分の土地を持てたわけですから。

**答** 自作農というのは団体沢にいたくらいで、あとのほとんどは小作だった。

**問** その小作というのはどこの小作になるんですか。

**答** 浦幌市街の藤一さん、飛田さん、北村さんの小作だった。豊作のときなら反2俵の小作料だった。大豆なら4俵くらいだった。米で取れた年で5~7俵だ。そこから2俵を小作料として納めることになる。昔も今も同じだけれど、本当に小作というのは辛いものだった。農場の親方というと小作人から見れば格段の差だった。林田農場の玄

関には小作人は入ることもできなかった。その当時でも農場を経営するような人のところには牛が何十頭もいたものだ。

**問** ホルスタインですか。

**答** 捣乳牛は割と少なかった。肉牛が多かった。中川北松さんも短角やエアッシャーを4~50頭もっていた。

**問** それは大正時代のことですか。

**答** 大正時代のことです。

**大谷** 芽室にも竹沢農場というのがあって、30戸ばかりの小作人がいた。そこでも使用人を使って親牛を扱っていた。搾乳牛と肉牛だった。その当時、牛乳を天秤にかけて街まで運んでいた。ほとんどは市街の人が飲んだものだ。鉄板でつくった牛乳缶だった。

**中井** 今のように立派な協同組合とかの組織がなかったものだから、「加賀団体」としてどこまでも団結する必要があった。昔、書類を見たことがあるんですが、余裕のある人がいくらかづつお金を出して、会計さんを決めておいて、肥料なんかも個人で買わないで「加賀団体」として買った。また、誰か体の調子が悪いとかいうと皆で助けた。

**問** 一種の組合のようなものですね。

**中井** 本当によくやれたなあと思いますが、そのおかげでこうした人間関係ができたんだと思います。

**問** 現在、稲穂地区というと町内でも最も良い畑作地の一つじゃないですか。

**答** ある一部はそうでしょうね。

**問** 去年の暮に仕事の関係で町内の畑作地の単価を調べたことがあります、稲穂・万年が最高ですね。それと上浦幌ですね。

**中井** 稲穂地区は2度農地法の適用を受けたような地域です。昭和22年に農地法が施行され、ある程度大地主の土地をみんなに按分したような形になった。そして、昭和25年から30年の開拓法のときに一際を国に返してしまった。一度白紙に返した。それから碁盤の目にきざんだんだけどもうまくいかない面もあった。そうした意味で、他の部落とは違った土地の動き方をしている。そういう影響もかなりあるんじゃないかなと思います。その当時で66戸だったと思う。現在は教員を除けば29戸となる。世の中の動きが大変激しいように感じます。

**問** それからですね、石川県ということですから

浄土真宗ですか。

答 門徒ですから、浄土真宗ですね。

問 あのあたりは浄土真宗一色ですね。そして、仏壇なんかも立派なものを使いますね。

答 宗教関係も熱心なところですね。仏壇なんかは、開拓で入って来ていますから豪華なものはないですが、当初、月に1回は15日を「御講」といって、「報恩講」というのですが、定例日としてやっていたということです。

問 現在はやっていないんですか。

答 現在はやっていません。当番制で各個人の家でやっていたんです。「御講仲間」という仲間で相当金も出し合って、書き物のようなものをこしらえてあるらしいです。本山から何か受けているらしいです。現在残っている人は7人です。

問 その報恩講というのはお坊さんを招いて行うわけですか。それとも仲間だけが集って行うわけですか。

答 坊さんを頼んでやるというのではなく、宗教的に熱心な人たちが集ってやっていた。先々代の人たちは「お経さん」もみんな覚えていたので、当番制で個人個人の家でやった。ただ1年に1回はお寺さんを呼んでやっていたらしい。

問 今、「お経さん」と言いましたが、お経に「さん」をつけるんですか。

答 それは自然とそうなる。尊いものだと思うから。親から仏さんの前で「お経さん、お経さん」と言われていたものだから、

問 そういうちょっとしたところに、昔からのことが残っているんですね。今はどうかわかりませんが皆さんのが子供のころ、石川県のことばというものは残っていましたか。

中井 よく富山の薬屋さんなんかが来たときにわざと郷里のことばを使ったことがある。今でもかなり出ます。

竹田 僕はまだ年は若いけど、割と郷里のことばが多いんですよ。

問 それはやはり父親の影響ですか。

竹田 爺さんの影響だ。今でも「そうやったかいね」と最後に「ね」をつける。どうしてもそういう環境だったから。「そうやったかいの」と「の」をつけることもある。女人であれば「ありがとう」が「あんやとう」になる。我々のような年寄りであれば「コッパオジ」という。「コッパ」

は「コワッパ」の訛ったもので小さいという意味だと思う。今は出ないことばだ。小グループだから親しみをこめてコッパオジと言った。

問 住吉神社の話に戻りますが、屋根の組み方が面白いですね。当時この社殿は玄人の人が造ったんですか。

答 全部素人が造ったんですが、舟田権次郎さんという人が石川県の住吉神社をわざわざ見に行つて、屋根の組み方がどうなっているか調べたということです。それをまねして自分たちで造ったということです。大変頭の良かった人でもあったし研究もしたらしい。

問 天井はあとからつけたものですね。

答 これは大分後のことです。大正か昭和の初めに山火事があって、豊頃からこちらの方が全部燃えたことがある。部落民全員で消火にあたったそうです。何日も燃え続いた後、雨降りがあってそれで下火になった。そのときに、向かえ火を焚いて防いだ。そういう野火のあったときに皆で「神社は大丈夫だったな」と話し合って、帰りしながら神社の床下を見るとブスブスと煙が上っていた。現在でも土台の焼けた跡が残っている。あたりは全部焼けたのに神社だけが残った。この火事が大正13年5月10日だったんですが、この日を「ヒヅセ(火伏せ)」といって毎年お祭りしていました。土台が燃えていたのを伏せたという意味だ。又、団体の者の家は1軒も焼けなかった。昭和44年までは実施していました。

問 昔はよく山火事がありましたものね。それでは、本当に長時間にわたり稲穂の古い時代のことや加賀団体の話をお聞かせ下さいましてありがとうございました。これで終了させていただきます。

(\*浦幌町郷土博物館学芸員\*\*厚内公民館主事)

1985年1月15日	印 刷
1985年1月20日	発 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 実 村 克 行	
発 行 所 浦幌町郷土博物館 (089-56)	
北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地の1	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社 (080)	
北海道帯広市西7条南6丁目	